

共同助成(兵庫県遊技業協同組合)

「フィッシュシェアリング」事業

子ども食堂や食育現場へ地元の魚を提供し、 尼崎の海や魚について知ってもらう取り組み

地元の海で獲れた魚を子ども食堂や食育現場に食材として届けることを通して、子どもの貧困対策へのサポートや地産地消の大切さの啓蒙ができるのではないかと。兵庫県尼崎市の海を拠点に、訪れる釣り人の協力を得ながら、そんな活動に取り組んでいる団体がある。子どもたちの成長を地元の魚で応援する夢のある事業を見る。



子ども向けのイベントを開催したり、釣れた魚の余剰分を冷凍保存し、子ども食堂や食育活動に使えるよう無償で提供



釣り人が釣った魚を提供してもらい、 加工・保存して子ども食堂に届ける

兵庫県尼崎市南部には、年間約10万人の釣り人が釣りに訪れる。「武庫川ECO-LABO」はその釣り人に協力をお願いし、釣れた魚の余剰分を新鮮なうちに提供してもらい、それをしっかりと下処理した後で、真空パックで冷凍保存し、地域の子どもの食堂に提供したり、食育活動を実施している福祉団体などに提供する「フィッシュシェアリング」に取り組んでいる。また同団体では、尼崎市の海と魚について知ってもらうためのPR活動や魚のおいしさを伝えるための試食会、定期的な水質や魚の調査なども行っている。

同団体では2020年度、POSCの助成を活用し、これまでの事業の継続や、子どもを対象とするイベントへの初参加などの活動に取り組んだ。まず、フィッシュシェアリングについて知ってもらい、魚の提供の協力をお願いするため

の周知活動として、武庫川チヌ釣り大会を開催した。この大会は尼崎市からも後援していただき、市長賞の冠をもらった。この大会以降、2020年度は1年を通して魚の提供が多く、子ども食堂を中心に例年以上に食材を多く提供することができた。

「昨春はコロナ禍の影響で給食も止まったため、子ども食堂も例年以上に開催を望む声が多くあったそうです。そのような状況下で、例年以上に食材提供を通して子ども食堂をサポートすることができました。地元の魚で子ども食堂への支援ができたことで尼崎市や社会福祉協議会といった行政からも協力をいただき、特に子ども食堂を管轄する部署からは当団体の活動に賛同していただき、いろいろな場所で当団体や活動についてのPRを行うきっかけとなりました」と、同団体理事長の宮本悦男さんは話す。

食育イベントや教育イベントなどで 地域に愛着がわくきっかけをつくる

また、同団体の活動の中心地である尼崎の湾岸部に子どもたちを呼び込んで、海と魚に触れて楽しむとともに、釣った魚を自分たちで調理して食べる食育イベントも、10月～11月にかけて計3回実施した。

さらに新たな取り組みとして、8月にあまがさきキューズモール・小田北生涯学習プラザで開催された「森の自由研究フェス」に同団体のブースを初めて出店し、武庫川に生息する小さなエビを使った釣り体験を提供した。自粛により、出歩く機会が少なくなった子どもたちに、地元で生息する生き物で夏の自由研究の素材を提供できたことは、同団体が目的とする地元のPR活動にもつながった。

「普段は子ども食堂で調理済の魚だけを見ている子どもたちが、実際の形を見たり、触れたり、また食材となって

いく過程を知ったりすることで、地産地消の大切さを学ぶことができたと思います。また、子ども食堂を利用する子どもたちからお礼のお手紙をいただくことがありますが、普通、子どもたちが描く魚は色も形も空想上のものが多いのですが、食育活動に参加した子どもたちが描いた絵は現実の魚になっていました。自分たちが釣り上げ、調理した魚の色や形をしっかりと記憶してくれていることは、食育が成功している大きな証と思っています」と、宮本さんは活動の手応えを感じているという。

兵庫県遊技業協同組合より

海で獲れた魚を子ども食堂や食育現場に食材として届ける「フィッシュシェアリング」が全国に広がることを願っています。



子どもたちを対象とした食育イベントも実施し、海と魚に触れて楽しんだ



助成団体:特定非営利活動法人 武庫川ECO-LABO

<https://www.mukogawaeco-labo.com>



活動が続けることがPOSCへの恩返しと思い、今後もがんばります

NPO法人としての初年度に多くの助成金をいただき、本当にありがとうございました。今回の助成で地元の子どもたちへの多くの支援や今後につながる活動ができたことに感謝しております。特に周知活動・イベントにより協力してくれる釣り人も前年度とは比べ物にならないほど集まってくれました。

特定非営利活動法人 武庫川ECO-LABO
理事長 宮本 悦男さん